

---

# 消しゴム。

椎名さかな

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

消しゴム。

### 【Nコード】

N7021C

### 【作者名】

椎名さかな

### 【あらすじ】

モノクロームの夢を見た。そう、あの明治や昭和の写真の色。世界は静かで厳粛で、あたしはゆっくり両目を閉じたら蒸し暑い布団の中で目が醒めた。

消しゴム。

モノクロームの夢を見た。そう、あの明治や昭和の写真の色。世界は静かで厳粛で、あたしはゆっくり両目を閉じたら蒸し暑い布団の中で目が醒めた。

「ねえママ。帰りに、消しゴム買ってきてちょうだい。勉強に使うの」

最後にあたしは短く告げた。

エアコンが必死に冷気を吐き出してる部屋の中、あたしが耳に当たった携帯電話の向こう側に今はもう誰もいない。無機質で単調な機械音があたしの耳を素通りして消えてく平日の昼下がりに。

高く昇った太陽が、ベッドの中のアたしを照らす事は無い。

だってカーテン閉めてるもん。

「それであたしを消してちょうだい」

あたしは一人小さく呟く。

十八度に設定したこの空気だけが素肌に絡み付くように、あたしに毛布の温かさを教えてくれる。

此処は漫画本や衣服が散乱した、あたしの部屋。あたしだけの部屋。あたし以外誰も、先生も友達も足を踏み入れる事なんか赦さない、あたしだけの薄暗い聖域。

毛布は生き物じゃないからホントは冷たいの。人間の優しい温もりが、それを温めているだけなんだよ。

あたしは自分にそう言い聞かせてる。そして、人間はホントは温かいものなんだって、毎日覚えようとしている。

そう錯覚して、暗示をかけて、間違っって覚える事であたしは、他

消しゴム。

消しゴム。

人を庇おうとしてる。あたしを座礁させようとしてる他人を庇って自分自身を責める事であたしは、ゴミ捨て場に引つ掛かって揺れるビニール袋みたいにギリギリで自分を取り繕っているんだろう。

……毛布の温もりなんて、他人じゃなくて所詮あたしの体温ではないのにな。

毛布があたしを包み込む事で、あたしには誰かが傍にいて、優しく抱いてくれているんだと思ひ込むんだ。

排気ガスとトラックがごうごうと勇ましい声を上げ、国道を駆け抜けていく平日の午後一時。カーテンの隙間から覗く光を拒むようにあたしはたった一枚の毛布に包まる。

此処は寒くて、でもとても温かい。あたししかいなくて、全ての音が遠く聞こえる所。遠くても全部、聞こえてくる場所。

そう、あたしには全部、聞こえてくる。誰かが何処かで呟いた陰口も、地球の裏側の戦争の悲鳴も。

あたしは胎児に戻ったみたいに膝を抱えて丸くなって、目を伏せる。世界は丸く量り知れない、この先あたしはどうなるんだろう、明日の朝に毛布から出た途端息が出来なくなって死んじゃうかも。

不安定で非現実的な思考が頭の中をメリーゴーランド。目を閉じればゴウゴウ、ドンドンと、働く機械達の低い低い音が内側と外側からあたしを揺らしてくる。この聴覚からの錯覚は本当にママのお腹の中に戻ったみたいなの演出をくれて、あたしはそれが嫌いじゃなかった。

この毛布の外に出る瞬間に、生きるか死ぬかの選択を毎回提示してくれるから。

あのね。あのね。おかしいの。なんだかおかしいの。

せっかくママが買ってきてくれたのに、この消しゴムは使えないの。

消しゴム使っても消せないの。

ぐに……っ、ってあたしの皮膚は形を歪めても、消しゴムで消した所が消えないの。皮膚もすぐに元に戻っちゃうの。

机の上に踵をあげてね、臍をガシガシ擦っても、消しカスの一つだって出ないんだよ。

こんなのオカシイよ。

あたしは消しゴムで消せないの？

そんな事無い。

あたしは消しゴムで消せないと困るんだ。

誰かの記憶の中に残って、ずっと生きるなんてまっぴら。

このメーカーの消しゴムは消えない。

だけどこれ前のメーカーの消しゴムも、これ前の前のメーカーの消しゴムでだって、あたしは消えなかった。

なんで？

どうして？

そっか、この消しゴムが悪いんだ。

でも消えませんでした、っていつでも使用済みの消しゴムは返品出来ないってママが言ってた。

消えない消しゴムは要らないよ。

消しゴムのくせに消せないんだもん。

そんな消しゴムに使い道無いじゃん？

そんなの消しゴムだなんて言わない。

そんなのにこの世に存在する理由だって、これっぽっちもないよ。イライライよ。

だからね、あたしね、罰として、食べちゃう事にしたんだ。消しゴム。

ずーとずっと前、お姉ちゃんがね、

「あんまりミカンばっか食べてると、あんたミカンになっちゃっよ」  
って言った。

そしたら本当に手の平が黄色になってきたんだよ。あたしは怖く  
なってきた、それっきりミカンはもう絶対食べない事にしてる。

つまりね。

だからね。

うん、そういう事。

あたしが消しゴムを食べるとね、いつか手の平から白くなってい  
ってあたしは消しゴムになれちゃうんだよ。

味はなんとも言えないなあ。

最初はゴム噛んでるみたいだった。修正液クサイゴム。メーカー  
によっては、固めのコンニャクみたいなのもあったなあ。ぐにぐに  
しててね、厚かましくあたしの歯を押し返して抵抗してくんの。ま  
あ、奥歯で粉々に噛み砕いてオレンジジュースで飲み干してやった  
けどね。ザマーミロ。

匂い付きの奴は最悪だった。消えない上に酷い香りでも口の中から  
鼻に逆流してくるし、飲み込んだ後も暫くあのプラスチックの香り  
玉をごちゃまぜしたようなフザケた後味が消化器官に染み込んであ  
たしの細胞を犯してくる、あの酷い後味には今も吐き気を覚える。

今日の消しゴムはコリコリしてる。鳥軟骨の唐揚げみたいだなあ。  
最近、ママの消しゴム選ぶセンスがずっと良くなった気がする。後  
で褒めてあげなきゃ。

あたしは消しゴムになったらね、どうしてもしてやりたい事があ  
る。

別に、そんなにたいした事でもないんだけどね。

あたしの身体をカッターで切つて、斜め後ろの席に座ってる、ム  
カつくあいつにぶつけてやるんだ。

消しゴム。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7021c/>

---

消しゴム。

2008年11月7日08時50分発行